

ひょうごの遺跡

平成9年2月8日発行
兵庫県教育委員会
埋蔵文化財調査事務所
神戸市兵庫区荒田町2-1-5
☎652 TEL 078-531-7011
FAX 078-531-7014

平成8年度 発掘調査成果速報展特集

兵庫県新しい歴史の風

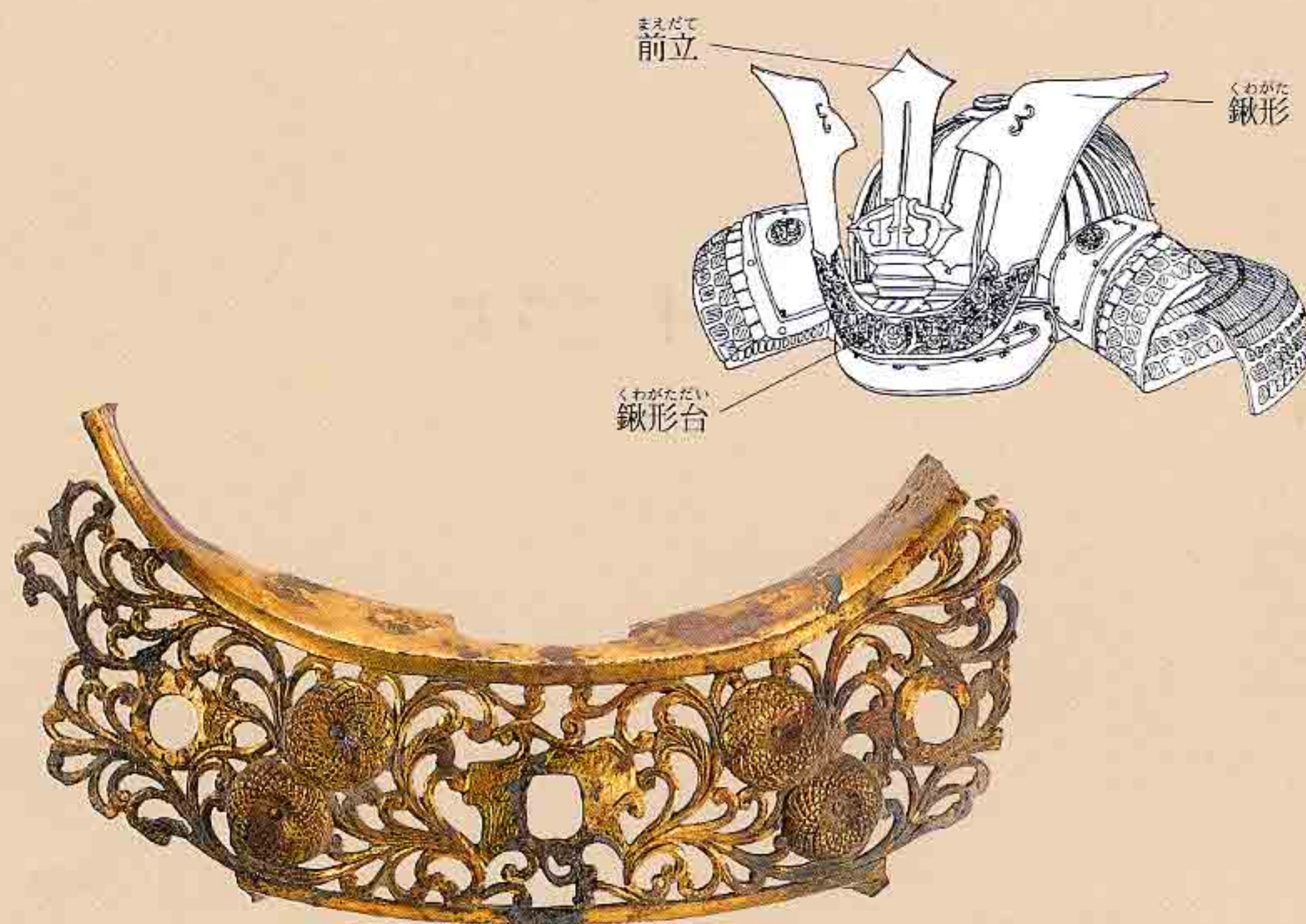
阪神・淡路大震災の復興と埋蔵文化財Ⅱ

と き：平成9年2月8日(土)～2月18日(火)10時～17時
ところ：神戸クリスタルタワー5階・県民ギャラリー

1995年1月17日未明に起きた阪神・淡路大震災により未曾有の被害を受けたこの地神戸に、かつて「福原京」という我が国の都があったことを知る人は思いの外少ないようです。

当事務所では、1都2府32県4政令指定都市から延べ79名もの専門職員の皆さんの支援を得て、復旧・復興に伴う発掘調査を進めてきました。こうした中、かつての都の経済基盤であった「兵庫津遺跡（大輪田泊）」の調査も始まっています。やがてこの遺跡が、兵庫県を代表する遺跡になるかも知れません。

さて今号は、平成8年度に行った発掘調査の成果を速報展示するための特集といたしました。大震災から立ち上がる街の様子とともに、全国からの支援職員の活躍する姿や兵庫県の新しい歴史の風をご体感下さい。



宮内堀脇遺跡出土の兜（鍬形台）

3 万年前の人びと

七日市遺跡（氷上郡春日町）

★七日市遺跡物語

はるか遠い遠い昔、3万年前の七日市へようこそ。まだ、米作りは行われていない時代です。

ここで暮らす人々は、この七日市付近に時々現れる「ナウマンゾウ」や「オオツノシカ」を捕って、その肉を食べていました。

大きなゾウやシカを仕留めるためには、道具が必要です。それは、木や骨で作った「ヤリ」でした。槍を持ったハンター達が、ゾウを取り囲み、追い詰め捕らえました。獲物を解体するのに、彼らは特別な道具を愛用していました。石で作った斧です。斧の刃は磨かれています。斧はこの刃の部分だけが磨かれているので、私たちは「局部（刃部）磨製石斧」と呼んでいます。また、彼らの道具袋には肉や皮を切る道具も入っていました。それが「ナイフ形石器」です。ナイフの形に似ているので、そう名付けています。

このように、3万年前の七日市の人びとは道具袋に入っている色々な道具を使い、ゾウやシカをハンティングして生活していました。

3 万年前の七日市遺跡

丹波地方の氷上郡春日町にあるこの遺跡では、現在より3万年から2万5千年前の人々が暮らしていたようです。石を打ち欠いて作る道具（石器）や石屑が散らばっており、この場所で生活した跡が残っています。今回の調査では、石の道具や石屑、素材となる原石など1千点以上の石器を発見することができました。

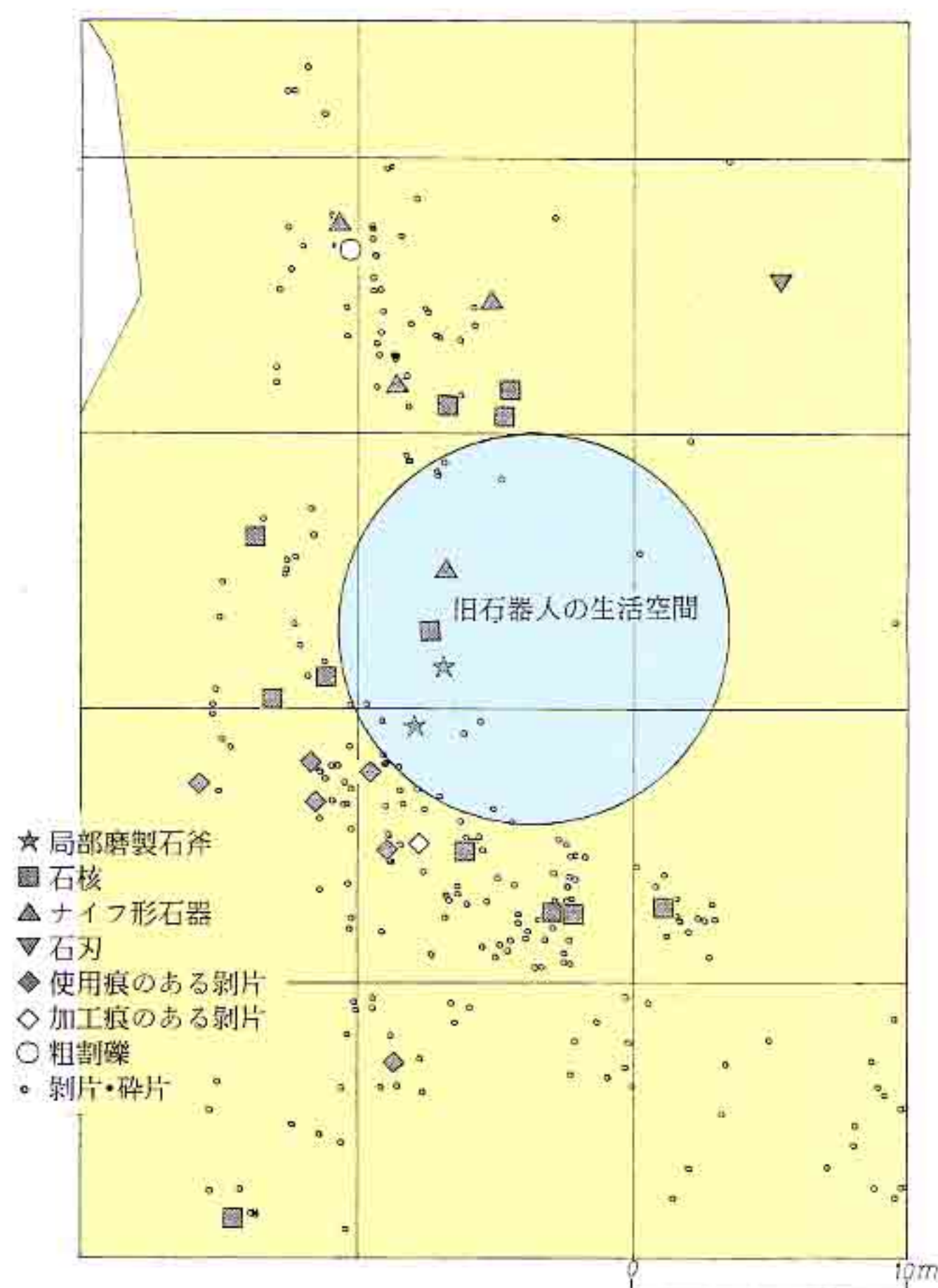
私たちは、この時代を「旧石器時代」と呼んでいます。つまり、人類が石器を作り始めた時から土器の発明（約1万年前）までの期間を旧石器時代と言い、その時代の人々を「旧石器人」と呼んでいる訳です。

再現された旧石器人の生活空間

七日市遺跡では、右図のようなドーナツ状にたくさんの剥片（石屑）が密集して分布し、中央部に石器分布の少ない場所がありました。この石器分布をを細かく観察してみると、次のようなことがわかります。



生活空間と石器の分布（青色部分）



中央部には剥片が少なく、局部（刃部）磨製石斧やナイフ形石器の道具が存在します。そして、その空間を取り巻くように「石核（道具の素材をはぎ取った残り）」・「使用痕のある剥片（何かに利用した石片）」や加工痕のある剥片（軽微な加工をした石片）などが、単なる剥片・碎片とともに散って（捨てられて）います。

私たちは、この空間の位置こそが、旧石器人が活動していた場所（キャンプ場）であると考えています。

旧石器人の道具袋の中身



出土したナイフ形石器

旧石器人は、様々な道具を持っていました。動物を狩りする槍、獲物を解体するための石斧、ものを切るナイフ形石器、肉と皮を剥ぎ取る小道具「スクレイパー」、道具入れ用の「皮袋」などです。ナイフ形石器は、この遺跡を代表する道具のひとつで、木製槍の先端にも取付けられていたようです。

しかし、残念なことに3万年も時間が経過しているため、石で作った道具以外（木製や皮製の道具、衣服）は腐ってしまい、残っていませんでした。

ナウマンゾウの解体用具

ナイフ形石器とともに、この遺跡で特徴的な道具は石斧です。今回の調査では、3点の石斧を発見しました。これらの石斧を細かく観察すると、刃の部



白色粘土層から出土した石斧

分が磨かれているのです。

このような局部磨製石斧は、関東地方や中部地方の遺跡で多く発見されており、特に3万年から2万5千年前の旧石器人が愛用していたようです。

長野県野尻湖周辺の「日向林B遺跡」では、旧石器人が41点もの石斧を道具袋に入れ、暮らしていたと言います。これは、旧石器人の貴重な食料であるナウマンゾウの骨や牙が、野尻湖から大量に出土していることに大いに関係がありそうです。

また、全国的にナウマンゾウの数が激減する2万5千年前以降、旧石器人の道具袋から石斧が姿を消していることと合わせ考えると、これらの石斧はナウマンゾウの解体に使われていた可能性が高いと言えます。



出土した石斧（左端の石斧の長さ11.4cm）

環壕を持つ山上の弥生集落

表山遺跡（神戸市西区伊川谷町）

★表山遺跡物語

弥生時代のある時期、人々は可耕地から離れた高所に村を造ることを始めました。

当時の人々が米作りをしていた低地の集落と比較して、山の上のような高所に営まれた集落のことを、私たちは「**高地性集落**」と呼んでいます。

こうした村の成因については、軍事・**防御的集落**、**畑作農耕集落**、**祭祀的集落**、あるいは自然環境の変化に伴う一時移動集落などの諸説が提起されており、現在いずれとも決めがたい状況にあります。

ここ表山は、遠く瀬戸内海から、淡路島まで一望できる眺の良い位置にあり、村の中には「**環壕（濠）**」と言う大きな溝を掘っています。**讃岐**や**吉備産**の土器、**朝鮮半島製**と推測される近畿地方最古の「**小形（型）仿製鏡**」も持っていました。しかし、環壕にかかった橋と一部の竪穴住居にみられるように、火災を受けて村は短期間で廃絶しました。

高地性集落に環壕、鏡や土器の流入は、何を意味しているのでしょうか。弥生時代中期後半の実年代は紀元前に遡る可能性がでてきて、この遺跡と『**魏志倭人伝**』に記載のある「**倭国大乱**」が直接結びつくことはないようですが、その先駆けとなる動きと言えそうです。

遺跡立地と周辺の遺跡

表山遺跡は、明石川の支流である伊川中流域右岸の丘陵上（標高約60～90m）に立地する弥生時代中期末の集落遺跡です。

同時代の遺跡として、南の低地に「**池上北遺跡**」、中位段丘に「**池上ノ池遺跡**」があり、北東の丘陵には磨製石剣を持つ「**頭高山遺跡**」、西の丘陵には小形仿製鏡が採集された「**青谷遺跡**」が存在します。

表山遺跡は、明石海峡大橋アクセス道路建設工事に伴って発見されたもので、調査は南側の環壕とその内外の一部に限られています。

環壕に守られた村

今回の調査で特に注目できるのは、環壕と考えられる大きな溝を持つことです。

発掘した環壕は、断面の形が逆台形を呈し、長さ約50m、幅約4～6m、深さ約3mを測りますが、さらに山の奥側に大きく広がると予想できます。

また、環壕には幅が少し狭くなる所があり、そこに柱の痕と思われる窪みと炭化材が見つかりました。これは、壕をわたるための橋状の施設と考えられ、窪みの部分がよく焼けていることから、火災にあったものと推定できます。



表山遺跡調査地全景



環壕の断面

竪穴住居跡と段状遺構

環壕以外の遺構としては、竪穴住居跡と段状遺構があります。しかし、これらの遺構は傾斜地に土を盛って作ったものが多く、斜面谷（低い方）側のこの土は流されて元の形が残っていません。

竪穴住居跡は、環壕の内と外側で発見しました。形態がはっきりと判別できるものは、この外側にある円形の1棟だけです。環壕の内側で見つかった住居の1棟では、多量の土器を発見しています。特に高杯たかつきが多いようです。また、外面に赤い彩色を施した高杯やミニチュア土器などもあります。こうした特殊な土器を使用したこの住居は、祭祀のための特別な施設だったのかも知れません。



環壕内側の竪穴住居跡

さらに、住居跡には焼土や炭化材を多量に出土するものもあり、火災にあったものと考えられます。

段状遺構は、傾斜地を等高線に沿って断面L字状に掘り、細長い平坦面を造るものです。平坦面には、溝やピット（穴）を持つものもあります。この遺構については、住居に雨水が流れ込むのを防ぐ施設や、掘立柱建物ほったてばしらなどと想定されていますが、どんな機能を有するものなのかよくわかっていません。

出土土器と小形仿製鏡

この調査では、発見した遺構の多くから土器が出土しています。これらは、全て弥生時代中期末頃に相当することから、限られた一時期に営まれた遺跡であることが明らかになりました。また、他の地域から持ち込まれた土器もあり、特に讃岐地方（香川県）や吉備地方（岡山県）などで作られたものだと確認できました。

さらに、調査の最後で最も興味深い発見がありました。それは、環壕内の橋状施設と考えていた地点から、「小形仿製鏡」が出土したことです。



小形仿製鏡（面径4.6cm）

この種の鏡は、中国の鏡を真似た小型の鏡で、主に朝鮮半島南部や北部九州で作られ、後に畿内でも生産されるようになりました。発見したものは、文様の部分がわかりにくいのですが、内行花文鏡ないこうかもんきょうと考えられ、鏡の型式から朝鮮半島で作られた可能性が大であります。

また、この鏡の製作時期は表山遺跡の集落が営まれた時期とほぼ同じであることから、鏡が作られてすぐ集落に持ち込まれ、間もなく環壕に埋まったものと考えられます。

これまで、近畿で発見された鏡は弥生時代後期以降の遺跡から出土しており、出土状況も遺跡に伴ったものかどうか不確定だったのです。このことから、表山遺跡の鏡は近畿へ持ち込まれた最古の例であり、出土状況からみても、時期が特定できる全国的に最古の小形仿製鏡と判明しました。

以上、今回の調査では、弥生時代中期から後期への転換期にあって、山上に集落を構え環壕を持つなどの緊張した社会情勢、讃岐や吉備地方の土器と小形仿製鏡うかがの流入といった西方の人々との活発な交流（移動）が窺えます。これは倭国大乱の先駆けとも言える様相を示しているのでしょう。

—— 大型柱列の実年代 ——

武庫庄遺跡の調査では、弥生時代中期の大型柱列（掘立柱建物、短辺8.6m×長辺10m以上）が注目されました。今回は、この柱列が建てられた年代についてお話してみましよう。

遺構の使用された年代を推定するには、出土した土器や自然科学の分析が参考となります。弥生土器は、形態や文様などが時期により変化することから、一緒に出土した製作年代の明らかな遺物（中国の貨幣や鏡など）をもとに、土器の変遷（年代）を知ることが出来ます。さらに、武庫庄遺跡では自然科学分析の「年輪年代測定法」で、柱穴出土の柱根の年輪から、柱が伐採された年代を割り出すことができそうです。

さて、大阪府の「池上曾根遺跡」では大型建物1から出土した中期の土器（IV-3様式）について、これまでの年代観で1世紀後半としていましたが、建物の柱根を年輪年代測定法にかけたところ紀元前52年の伐採であることが判明し、弥生時代中期後半の実年代は約100年遡る可能性ができました。

当該遺跡の大型柱列の調査では、柱を埋めた穴の

武庫庄遺跡（尼崎市武庫之荘）



大型柱列内出土の土器

中から中期（IV-1ないし2様式）に属する壺・甕・鉢・高杯などの土器片が出土しましたので、現段階では1世紀中頃の年代とされています。一方、年輪年代測定法の結果は、辺材と樹皮が削り取られてしまっているため、そこから読みとれる年代が即伐採年代とはなりません。心材の年輪が紀元前245年、辺材部分を考慮に入れると紀元前168年であろうと推定されます。

二つの遺跡の年輪年代測定結果をみると、判明したのはあくまで柱の伐採年代ですが、柱が古い建物柱の転用でなければ、伐採年は建築時の年代に近い訳で、必然的に土器の年代も遡らねばなりません。

—— 子持勾玉のまつり ——

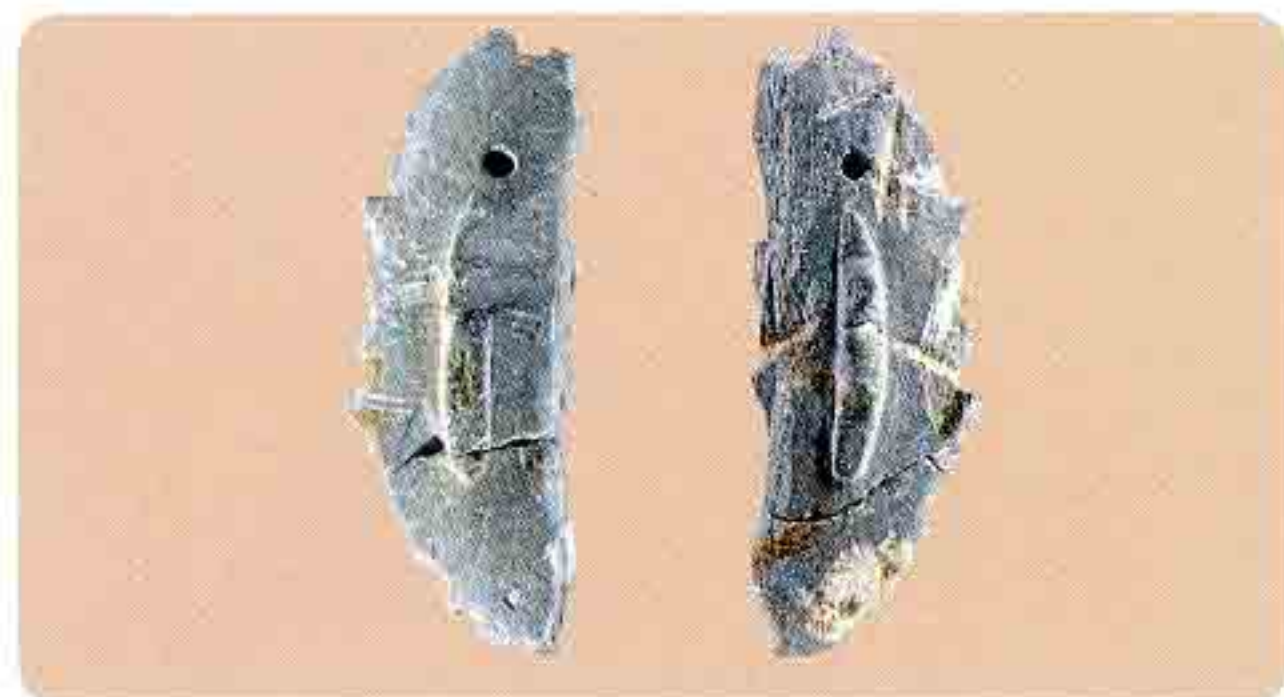
高畑町遺跡は、阪急西宮スタジアムの南側に位置する弥生時代から中世にかけての集落跡です。これまでの調査では、古墳時代後期の「大型掘立柱建物」と河川跡から出土した滑石製や木製の祭祀具などが注目されました。写真の子持勾玉は、大型掘立柱建物のあった地点から、東へ約150mのところの調査で出土しています。

この調査では6世紀後半から7世紀前半頃の堅穴住居跡を11棟確認し、子持勾玉はこれらの住居の一つから6世紀末の土器と一緒に見つかりました。

子持勾玉とは、大きな勾玉のまわりに複数の小さな勾玉を付けたもので、様々な祭祀に使用された道具と考えられています。兵庫県下では15例目、住居跡からは初めて出土した特異な遺物です。

高畑町のものは、長さ9.9cm、最大幅3.7cm、最大厚2.1cmで、お腹側に1つ、背中側に2つ、両側の側面に2つずつ、全部で7つの子供の勾玉を表現しているものと思われます。紐を通すための穴は両面から穿孔しています。なお、親勾玉の断面形態が扁平化しているのは新しい時期の要素です。

高畑町遺跡（西宮市高畑町）



子持勾玉

素材は滑石と呼ばれるやや緑がかった灰色の軟かい石で、5世紀頃から有孔円板、剣形品、臼玉など祭祀用に作られる模造品の材料となっています。

祭祀の対象は、堅穴住居跡の床面直上という出土状況から考えると、この住居の住人が家の祭祀（家を廃棄する時の祭祀も含む）に用いた可能性が高いと思われます。

このように、本遺跡の子持勾玉は出土遺構と伴出遺物が明らかなことから年代を確定でき、さらに祭祀の性格をも推測できるので、古墳時代の祭祀を考える貴重な資料となっています。

—— 光輝く金銅製の鍬形台 ——

宮内堀脇遺跡は、山名氏宗家の居城「此隅山城跡」の南西側に位置しています。平成7年度の調査では、『ひょうごの遺跡』21号にご報告したように、15世紀末から16世紀後半の山名氏時代の武家屋敷跡を発見しました。遺構と遺物の残存状況は極めて良く、全国的に注目されているところです。

今度、遺物の整理を進めていく中で、兜の一部である「鍬形台」（巻頭写真）と呼ばれるものが見つかりました。兜などの甲冑は、伝世品として残るものが多く、発掘調査で発見されることは稀なことなのです。

この鍬形台は、室町時代中期から後期頃の金銅製品で、残存長9.7cm、幅5.4cm、厚さ0.9cmを測ります。唐草紋と小菊紋は透彫りになっており、細かい線で非常に丁寧に作られています。また、鍍金方法は「振付メッキ」という金と水銀を混ぜた後、高温にして水銀を蒸発させる高度な技術が用いられています。さらに、鍬形台の中央上部には「前立」を装着するための窪みを持っています。

さて、この鍬形台を付けた兜は一体どんな形をし

宮内堀脇遺跡（出石郡出石町宮内）

ていたのでしょうか。

当時作られた兜は「阿古陀形」という前後に膨らみを持つカボチャ形の筋兜が主流でした。これに鍬形台を付けたものが巻頭写真横の図です。このような兜は、山名氏もしくは上級家臣が身に着けたものなのでしょう。



真鍮製の灰匙

その他、珍しいものに「灰匙」があります。真鍮製で長さは16cm、茶の湯で炉中の灰、もしくは香木を焚いた後の灰をかきならすための道具でしょうか。

武家屋敷跡からの出土は、「天目茶碗」とともに屋敷の主が茶道や香道を嗜んでいた証拠となります。

—— カラフルな文字入り肥前産小皿 ——

近世尼崎城は、戸田氏鉄が築いた平城です。本丸跡に位置する城内小学校校舎の建て替えに伴って、尼崎市教育委員会が当事務所の支援を得て調査したものです。今回は、本丸御殿跡から出土した江戸時代後期の肥前産（現在の佐賀・長崎県の一部）磁器の皿を紹介しましょう。

口径9cm、器高2.8cmの小皿で、内面は呉須（青色の釉）で文様が描かれ、同底部には輪状に緑彩が見られます。また、口縁部には「御臺所」という文字が赤色に上絵付けされています。

17世紀後半から18世紀代の肥前産の皿の多くは、内面の底の釉を蛇ノ目状に剥ぎ取っています。これは、重焼きの際に皿と皿が付着するのを防ぐための手法です。底面にある輪状の緑彩は、釉を剥ぎ取った痕を隠すために塗彩されたものです。

それでは、口縁部に書かれている御臺所の文字は、何を表現したのでしょうか。

江戸時代末に描かれた絵図を見ると、皿の出土地点は、居間・茶之間・料理之間・膳部屋に囲まれた庭にあたります。また、近くには訪問客や御殿詰め

尼崎城跡（尼崎市城内）



「御臺所」文字入り小皿

の側近たちの食事を用意する台所もあります。

このことから、御臺所の文字は皿の所属する部署を示していることが理解できます。また、同じ文字が書かれた同じ形の皿がもう一枚、同地点から出土しており、数枚がセットで使用されていたこともわかりました。

この白地に赤・緑・青のカラフルな小皿で、江戸時代の武士達は、どのような食事をとったのでしょうか。想像してみてください。遠い歴史が身近に感じられますよ。

ここだけの遺物のはなし

すずり
《硯》

かみわき
上脇遺跡（神戸市西区伊川谷町）

墨、筆、紙、硯を「文房四宝」といいます。中国を中心とする漢字文化圏では、文字ばかりでなく、こうした文具も共通性を持っています。

今日の硯はその字のとおり石でできていますが、日本で最初に作られた硯は焼物でした。仏教が伝来し、寺院の造営が始まった頃、瓦とともに硯も須恵器の窯で焼かれているのです。

飛鳥時代、奈良時代の硯は墨をする部分が丸い「円面硯」が主流です。当時、文字を書く必要があったのは、税に関する様々な記録を扱う「国府」、「郡衙」など役所や、写経をするお寺などに限られていました。そのため、硯が出土するとその遺跡の性格を推測することができます。また、須恵器の杯蓋の裏などを利用した「転用硯」も多く使われました。

平安時代には、墨をする部分が風という字の外形に似た「風字硯」が流行します。この硯は幅の広い方の裏側に脚があり、墨をする面が傾いています。さらに、この部分を二つに区切る仕切りのある「二面硯」もあり



色々な硯

ります。濃い墨と薄い墨、あるいは朱などを分けて使ったのでしょうか。その他、格子目の線刻をしたものは、墨を早くする工夫だったのでしょうか。

鎌倉時代になると、これまでの硯にかわって石の硯が普及します。現代のものと大差ない長方形の硯、楕円形や四葉形の硯もあります。こうした中には良質の石材を用いた非常に優美な形をした硯があり、中国から輸入したものもあるようです。

復興調査その日その日（平成8年度）

7月27日 武庫庄遺跡



◎現地説明会
「大きな柱やなァ。」

8月30日 高畑町遺跡



◎事務所上司の視察
「どやァ」「何とか……。」

12月20日 明石城武家屋敷跡



◎調査員と作業員さんの会話
「磁器がでますよ慎重に。」「ホンマや。」



編集後記

◇佐賀、青森、島根と新しい歴史の風が吹いています。兵庫の風も、満喫していただいたでしょうか？

◇復興の支援調査は最盛期に入りました。機会があれば、現場へもお立ち寄り下さい。

◇寒さ本番、ご自愛下さい。

（S.O）